

目指す学校像	○豊かな心が育つ明るく楽しい学校 ○学ぶ喜びを味わえる活力ある学校 ○家庭・地域とともに歩む開かれた学校
--------	--

重点目標	1 ICTを活用した学びの改革と個別最適な学びの実践 2 生徒指導の徹底と教育相談の充実 3 コミュニティ・スクールによる地域に開かれた学校づくり 4 教職員の指導力の向上と業務の精選
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価		年 度 評 価		学校運営協議会による評価				
年 度 目 標		年 度 評 価		実施日令和5年2月6日				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	<現状> ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに、全国や県の平均正答率を上回っている。 ○学校評価で「授業の内容をよく理解することができた」の質問において、「十分できている」と回答した児童が61%である。 ○市学習状況調査では、学びに向かう力等に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べて国語で多く、社会、算数、理科ではほぼ市平均、G・Sでやや低い。 <課題> ○授業の内容をよく理解することができるようにすることが課題である。 ○特に社会、算数、理科、G・Sでの学習意欲の喚起が課題である。	・タブレットPCを効果的に活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」に関する指導方法の研究 ・「さいたまSTEAMSEAMS教育」の推進	①タブレットPCを活用し、年間3回の研究授業・研究協議会を行い、個別最適な学びについての指導法を研究する。 ②タブレットPCを活用した学習活動の指導計画や実践事例を学年ごとにデータで蓄積してまとめる。	・タブレットPCを活用した研究授業・研究協議会を実施し、それをもとに指導法の研究成果をあげられたか。 ・学校評価で「授業の内容をよく理解することができた」の質問において、「十分できている」と回答した児童が70%以上になったか。(R3は61%)	・タブレットPCを活用した授業を日常の授業から実践した。ほぼすべての学級で、毎日ICTを活用した授業を実施した。 ・学校課題研修としてタブレットPCを活用した研究授業を行い、有効性を確認した。 ・学校評価での該当項目の「十分できている」の回答は62%(前年度比+1㊦)であった。	A	・タブレットPCをはじめとするICTの活用は、児童の学習に大変有効であることが確認できた。次年度は、さらにそれを追究するとともに、タブレットPCをツールとして活用し、授業に主体的に取り組める児童の育成を目指していく。	・児童がタブレットを使いこなしている、と感じている。自ら情報を検索するなど、主体的に学習している様子うかがえる。獲得する知識量も増えているのではないか。 ・タブレットの活用方法について、各児童に合った学び方を取り入れて学習活動を行っている。「個別最適な学び」 ・タブレットで児童に入れたくない情報の制限や、インターネットリテラシーについて指導してほしい。
2	<現状> ○市学習状況調査では、「自分にはよいところがあると思う」の質問に、肯定的な回答をした児童の割合は、市平均を下回る学年が複数あった。 ○経年劣化等により、傷んでいる施設・設備が多い。 <課題> ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していく体制づくりが必要である。 ○児童と教職員の安全を考えて、計画的に教育環境の整備をしていくことが必要である。	・児童一人ひとりに寄り添った教育支援・教育相談体制の充実 ・教育環境の整備と効果的な予算運用	①道徳教育の推進を教育活動の中心に据え、心豊かな児童を育成する。 ②認めて褒めて育てる指導を徹底し、児童の自己肯定感を高める。	・道徳授業を確実に実施し、自己肯定感を高めることができたか。 ・市学習状況調査で、「自分にはよいところがあると思う」の質問に、肯定的な回答をした児童の割合が、全学年で市平均を上回ることができたか(R3は4学年)	・児童一人ひとりの気持ちに寄り添った取組として、2学期に担任が全児童と面談を行った。 ・道徳授業を計画的に実施し、児童の心の教育に取り組んだ。 ・市学習状況調査での該当項目では、5学年が市平均を上回った。	B	・家庭環境の多様化に伴い、児童一人ひとりの気持ちに寄り添った支援や指導がより一層重要となる。担任が一人に対応するのではなく、学年や学校全体で組織的に児童を支えるため、ケース会議の常態化を目指す。	・2学期に担任が全児童と面談をしたとのことだが、生徒指導上心配な児童について、適切に保護者に伝えていることが分かった。 ・児童へのアンケートから、特にいじめや命に係る回答について心配な児童への対応を、意図的組織的に行っている。児童を守る取組として、引き続きお願いしたい。 ・児童の「死」に対する概念が漠然としている。アニメ、ゲームの影響か?
3	<現状> ○昨年度、学校運営協議会準備委員会を立ち上げた。熟議の上、本年度のテーマを「『あいさつ』や『思いやり』のある行動ができる児童の育成と設定した。 <課題> ○本年度から実施する学校運営協議会にて、本年度のテーマについて、学校、地域、家庭が具体的にどのような取組をしていくかを検討、実施、評価していくことが必要である。	・本年度のテーマを地域・家庭と共有する教育活動の公開・情報発信 ・地域、家庭とともにあるコミュニティ・スクールの実施	①学校日よりや学校Webページ等を利用し、学校運営協議会で設定した本年度のテーマを地域・家庭に広く情報発信する。 ②あいさつや思いやりのある行動を称賛し、地域、家庭でも取り組める具体的な活動を学校運営協議会で協議し、実施する。	・学校運営協議会の内容を地域、家庭に広報し、具体的な取組が実施できたか。 ・学校評価で「積極的な情報提供」の質問で、保護者からの肯定的な回答が、90%以上になったか(R3は87%)。	・本年度設定した「『あいさつ』と『思いやり』のある行動ができる上木っ子の育成」というテーマについて、学校だよりで広報した。 ・学校運営協議会では、学校、地域、家庭(保護者)が具体的にどのような場面でテーマに迫れるかを熟議で話し合った。 ・学校評価での該当項目の肯定的回答は82%(前年度比-5㊦)であった。	B	・学校運営協議会の内容については、より広く、保護者や地域にみなさまに周知していくことが必要である。例として学校だよりのほか、学級懇談会や、学校Webページなどを活用したい。	・地域で児童の登下校の見守りをしていると、あいさつは増えた気がする。学校の指導もあるが、毎日継続してあいさつすることで、認知されたということもある。 ・地域があいさつを続けることが、子どもたちの安全を守り、不審者対策にもなる。 ・コロナが落ち着いて、以前のように、児童と地域との交流が増えるとよい。(総合・生活科など)
4	<現状> ○Formsを活用した、欠席、遅刻、早退連絡システムを導入した。 ○令和3年度から学校課題研究として「ICTを活用した指導方法」について研修を重ねており、エバンジェリストが中心となり、OJTを重ねている。 ○令和3年度の「よい授業」では、因子③で前回市平均を上回り、因子①②④ではそれを下回った。 <課題> ○経験の浅い教職員や学習指導等に不安をもつ教職員への支援を継続して実施する必要がある。	・意欲に満ちた教職員集団を醸成する校内研修の実施 ・教職員一人ひとりに応じた働き方改革の実施	①管理職による授業参観(特に経験の浅い教員)を年間2回以上実施し、具体的な指導・助言を行う。 ②小学校教科担任制の実施により、教員の専門性を高め、授業の質の向上を図る。	・経験の浅い教員、教科担任教員、専科教員の授業の質の向上が見られたか。 ・よい授業の全ての因子において前回市平均を上回ることができたか。	・年次研修や指導訪問、学校課題研修などの研究授業の機会をとらえ、管理職による授業参観を実施し、指導・助言を行った。 ・「よい授業」では、因子③で前回市平均を上回り、因子④は同値、因子①②は下回る結果となった。	B	・今後も経験の浅い教員の着任が予想されるため、管理職や経験豊かな教員による指導、助言が欠かせない。計画的に研修を行うなどして、教員のスキルアップを目指していく。	・教科担任制が高学年で導入され、若い教員やベテランの教員など、学級担任以外の複数の教員が授業をすることが、バランスよく、効果的であるように思う。 ・「部活動指導が負担」という記事を目にするが、本校の金管バンド指導は、音楽専科教員(金管バンド担当)だけでなく、外部指導者(週1回)や、本校の音楽部の教員が指導している。
		①会議資料のペーパーレス化を図るなど、教職員一人ひとりが業務改善の目標を定めて実践し、教職員が教材研究や生徒指導に取り組める時間を確保する。 ②来年度からの学校徴収金の口座振替方式導入のため、現金の集金業務を軽減する。	・教職員一人ひとりが業務改善の目標を定めて、実行することができたか。 ・学校評価で、「業務改善と在校時間短縮」の質問で教職員の肯定的な回答が65%以上になったか(R3は61%)。	・職員会議、職員研修でのペーパーレス化を進め、印刷業務の軽減を図った。 ・ICTの活用により、教材準備の時間の軽減が図られた。 ・学校評価での該当項目の肯定的回答は75%(前年度比+14㊦)であった。	A	・「教員でなくてもできる業務」を洗い出し、教員が児童と向き合う時間の確保に努める。例として集金業務や個人面談時間の調整、印刷業務の削減や廃止などである。 ・教職員の「心の健康を保つための計画的な休暇の取得」を支援したい。		